

ヴォルフの著書にみるドイツ語の諸概念

—認識に関わるターミノロジー—

河村克俊

I. ドイツ啓蒙と哲学のターミノロジー¹⁾

「啓蒙」という言葉には、少なくとも二つの意味がある。その一つは、個人ないし個人を構成員とする様々な規模の集団に関する「改善」、「改良」、「進歩」といった意味である。この意味での「啓蒙」は、時代や文化圏を超える高い一般性をもった課題だといえるだろう。個人の「改善」や「成長」というテーマは、何らかの最終目的を設定したとしても、誰もが常にその途上にいることになり、例外的な場合を除いて²⁾、それが完成することはないと思われるからである。また、共同体や社会の「改良」や「進歩」についても、時代や地域の制限を超えた普遍的なテーマであるといえる。そして、この脈絡での「啓蒙」もまた、最終目的に至るには無限の距離を踏破することが求められており、どのような共同体も、社会もが、その途上にあると考えられる³⁾。このような意味で最終目的は一

- 1) ヴォルフの業績全般について取り上げる『ヴォルフ読本』が2018年に刊行された。これは、ヴォルフの履歴にはじまり、哲学や法学そして数学や自然科学に至るあらゆる分野での著書、そしてヴォルフの影響史等を考察の対象としており、現在のヴォルフ研究を総括するものである。そこには、ヴォルフの哲学概念や方法論、言語哲学などは取り上げられているが、しかし彼が用いる主要概念について、それらがどのような意味で用いられているのかを主題化する章はみられない。以下を参照。R. Theis, A. Aichele, hrsg., *Handbuch Christian Wolff*, Springer 2018. ヴォルフのターミノロジーについての研究には、以下のものがある。Paul Piur, *Studien zur sprachlichen Würdigung Christian Wolffs*, Halle/Saale 1903; Wolfgang W. Menzel, *Vernakuläre Wissenschaft. Christian Wolffs Bedeutung für die Herausforderung und Durchsetzung des Deutschen als Wissenschaftssprache*, Tübingen 1996. メンツェルは、ヴォルフの用いたドイツ語の学術用語を全体として取り上げ、それらが言語史や学問史の脈絡においてもたらした変革について主題化している。特に、ヴォルフの学問概念について、それが単なる知識の集積や整理ではなく、個々の部分が全体と有機的につながる「体系」を意味するところに、先行哲学者との違いがあることを指摘している。確かにヴォルフは「体系」を説明する際に、人間の身体の内なる各部分の相互連関を比喻として用いていた（後述するマイスナーの『哲学辞典』603頁「体系」の項目を参照）。しかし、表象、構想力、統覚など、哲学の主要な概念について、ヴォルフがこれらをどのような意味で用いたのかを問題とするものではなく、本稿の主題とは異なる。また、ピウの研究は一部ヴォルフの主要な哲学用語を個別に扱っているが、しかし主にその起源について明らかにすることを扱うものであり、認識の成立に関わる主要概念について、その意味を明らかにするという本稿の課題とは異なる。
- 2) ここで例外として考えているのは、世俗的な一切の制約から自らを解放したような人々である。ショーペンハウアーはそういった人を「聖人」とみなし、そこに人間の一つの完成した姿をみている。以下を参照。Arthur Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung*, hrsg. v.W. Löhneisen, Darmstadt 1968, viertes Buch § 68, S. 521 u.a.
- 3) ここで最終到達点として想定しているのは、例えば諸国間に信頼できる連合が樹立され、各国家が互いに敵対的傾向性をもつ必要がなく、また個人の次元でも同様に他者に対して敵対的な傾向性をもたず、誰もが自らの潜在的能力を伸ばすことのできるような社会である。以下を参照されたい。Immanuel Kant, *Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht*, in: W. Weischedel hrsg., *Immanuel Kant Werke in sechs Bänden*, Bd. VI, Darmstadt 1964, S. 31-50.

つの理念であるが、これへと近づくことを促す「啓蒙」もまた、それ自身決して満たされることのない一つの理念だといえる⁴⁾。

「啓蒙」という言葉はまた、主に政治や社会制度に関する「改良」ないし「進歩」といったことが際立った仕方では達成されたとみなされる「時代」ないし「時期」を意味する。この意味での「啓蒙」ないし「啓蒙の時代」については、一般にヨーロッパ（特に西欧）と北アメリカの17世紀末から18世紀が考えられている⁵⁾。この第二の意味での「啓蒙」は時代概念であり、英仏独語にみられるように、暗闇に対する「光」がその象徴とされていた。この「光」により、何を照明しようとしたのかによって、各地域の「啓蒙」の性格が分かれることになったといえる。ドイツでの「啓蒙」に関していえば、それが照らし出した、ないしは照らし出そうとしたのは、何よりもまず文化ないし教養の分野での社会の改革であり、そのうえで諸々の個人が自立すること、特に宗教に関わる事柄について、与えられた規範にしたがうのではなく、自らの考えをもち、これにしたがうことであった⁶⁾。

W. シュナイダースは、ドイツでの啓蒙期の始まりを示す出来事として、1687年に Chr. トマージウスがライプツィヒ大学でドイツ語での授業を行ったことをあげている⁷⁾。この時代ドイツの大学ではまだラテン語で授業を行うことが一般的であったが、長い伝統をもつこの慣習を廃棄し、日々の生活で用いられている自らの母語を学術の分野でも使用することで、新たな時代がはじまったと考えるわけである。トマージウスは論理学や倫理学のテキストをドイツ語で書いているが、専門とする分野は法学であり、狭義の哲学の専門家

4) そもそも「啓蒙」は、これを自らの課題と考えることによってはじめてそのリアリティーをもつと言える。そして、これについて意識することがなければ、それは恐らく何ものでもないだろう。この意味で「啓蒙」は具体的な対象をもつ概念とは異なり、一つの理念である。ただし、これは潜在的には誰もが関心をもつ、ないしもたざるを得ない、高い一般性をもった理念だといえる。

5) W. シュナイダースの『啓蒙の時代』は、イギリス、フランス、ドイツを「啓蒙」の中心地として主題化し、北米についてはオーストリア、イタリア、ロシア等とともにわずかに触れるにとどまっている。以下を参照。Werner Schneiders, *Das Zeitalter der Aufklärung*, München 1997, S. 5f. これに対し I. クラムニクの『啓蒙読本』では、主にイギリス、フランス、アメリカの哲学者、思想家、政治家のテキストが抜粋されている。以下を参照。Isaac Kramnick, ed., *The Portable Enlightenment Reader*, Penguin Books 1995, Introduction, pp. ix-xxiii.

6) 文化ないし教養の分野での改革については、その後本文で触れるように、学術分野でのドイツ語の導入、またそのドイツ語での百科事典の編纂などがあげられる。ハレならびにライプツィヒで1732年から1750年にかけて出版された全64巻からなるツェードラーの『万有事典』は、時代の学術ならびに技術や芸術を集大成するものであり、一つの文化事業であった。『ヴォルフ読本』によれば、18世紀初頭の神聖ローマ帝国国内には36の大学があり、この世紀にさらに8つの大学が設立されている（『ヴォルフ読本』428頁）。これら諸大学に学ぶ学生や教職員が、まずはこの事典の読者として想定できる。しかし、その内容については、大学での講義等に関わる事柄だけでなく、宮廷や官房に関わること、技術や芸術に関わることなども含まれているので、より広範な市民層がこの事典の読者だったと思われる。この事典のデータについては、註16を参照されたい。また、ドイツ啓蒙を特徴づけるもう一つの主題である個人の自立ということに関しては、カントの「啓蒙とは何か」が扱っている。当時のドイツにおいては、宗教に関して、与えられた信仰に依存し続けるのではなく、いったんこれから距離を取り、もう一度自らの責任でこれを選択し、そのことで自らの信仰に関して自立することが特に重要視されていた。以下を参照されたい。Immanuel Kant, *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?* *Berlinische Monatsschrift*, Dezember 1784, in: I. Kant, *Was ist Aufklärung? Ausgewählte kleine Schriften*, [...] hrsg. v. H.D. Brandt, Hamburg 1999, S. 20-27.

7) W. Schneiders, *Das Zeitalter der Aufklärung*, München 1997, S. 17.

ではない。彼は認識の起源を探求することや、様々な事象の連鎖がどのような原理によって働くことでその総体である世界が成立するのか、といった問いについては、主題化することがなかった。

このような問いに取り組んでいたのは、およそ10歳年長のライプニッツだった。ライプニッツは生成する世界のあり方を制約する原理を「存在するものは、なぜそれが存在しないのではなく存在するのか、なぜ別様ではなく現にあるような仕方では存在するのか、ということについての理由をもつ」と定式化することのできる「充足根拠律」のうちに認めていた。こうしたいわゆる形而上学に属する諸々の主題について、ライプニッツは主にフランス語で著述している。遺稿として残された晩年の作品である『自然と恩寵の原理』や『モナドロジー』、また生前出版された数少ないこの分野での著書の一つである『弁神論』(1710)は、フランス語で書かれていた。そして『動力学試論』など自然哲学系のテキストについては主にラテン語で著述していたようである⁸⁾。ドイツ語での論稿も残されているが、主だった著作はフランス語とラテン語で記されていたといえるだろう。したがって、ライプニッツの思索から産み出された諸々の概念は、哲学の分野におけるドイツ語のターミノロジーの生成を主題化する脈絡では、その先行史のうちに位置づけられることになる。

狭義の哲学ないし「形而上学」という分野に限れば、ドイツ語で書かれた文献としてはヴォルフの『神、世界、人間の心、そしてあらゆる事象一般についての理性的な思惟』(1719)⁹⁾がまず想起される。『ドイツ語の形而上学』と略称されるこの著書は、「神」や「世界」そして「心」の活動について、このハレ大学の教授が自らの立場をドイツ語で語るテキストとして衆目を集め、またピエティスト派神学者との間に論争がはじまると、神学者たちがヴォルフの思索のうちに無神論ならびに運命論を読み込むための主要テキストとされることで、繰り返し言及されることになった。この著書はヴォルフの生前に12版を数えているので¹⁰⁾、『ドイツ語の論理学』とともにこれが彼の哲学の普及に貢献したことが推測できる。神学者たちからの批判にきめ細かく答えるために、ヴォルフはこの著書の別巻にあたるものを1724年に刊行している¹¹⁾。『ドイツ語の形而上学』(1719)以降さらにヴォルフは、ハレ大学時代に倫理学、政治学の分野でドイツ語の著書を主に講義のための教科書として上梓している。そしてマールブルグに移ったあと、再び論理学や形而上学をはじめとするあらゆる分野についてラテン語で執筆し、膨大な作品を残すことになった。また

8) ライプニッツの基本的観点ならびに著書については、以下の拙論を参照されたい。「充足理由の原理と自由—ライプニッツならびにヴォルフの自由概念」(関西学院大学言語教育研究センター『言語と文化』第14号2011年3月、pp.91-109)。

9) Christian Wolff, *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt* (DM), Halle 1719 (¹¹1751), Neudruck Hildesheim u.a. 1983.

10) Chr. Wolff, *ibid.*, Introduction von Charles A. Corr, S. 1. 編者コールによれば12版は1752年にでている。

11) Chr. Wolff, *Der vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, Anderer Theil, bestehend in ausführlichen Anmerkungen...*, Frankfurt a.M. 1724 (⁴1740), Neudruck Hildesheim u.a. 1983.

この時期に、彼のドイツ語著作にみられるタームに関する『哲学辞典』(1737)¹²⁾がマイスナーにより上梓され、ルードヴィキによる『ヴォルフ哲学の歴史』(1738)¹³⁾という概説書が出版されている。こうした事情が、ヴォルフのハレ帰還を準備したと考えることもできるだろう¹⁴⁾。

ここで、ドイツ語の学術用語の生成に関してヴォルフに注目すべき理由について確認しておきたい。その理由は先ず、ヴォルフが同一分野に関してドイツ語とラテン語の両方で執筆しており、学術用語の対応関係が比較的容易に確認できることにある。例えば「形而上学」に関して彼は、先に触れたドイツ語での著書を執筆したあと、ラテン語でもう一度執筆している。どちらも、存在論、心理学、世界論(宇宙論)、自然神学から成る。ヴォルフに注目すべき第二の理由は、彼のドイツ語での著作がこの世紀に繰り返し版を重ねており、多数の読者を得ていたと考えられるからである。メンツェルによれば、『ドイツ語の論理学』は14版、『ドイツ語の形而上学』は先に触れたように12版、『ドイツ語の倫理学』は8版、『ドイツ語の政治学』は7版を数えている¹⁵⁾。同時代のドイツ語圏には、このような講壇哲学者は他にいなかった。また、『ドイツ語の形而上学』にヴォルフは自ら専門用語の索引を附し、これに対応するラテン語のタームを付けている。ここには、自らの用いる新しい用語が、中世以来の長い伝統をもつ学術用語に対して、確かな対応関係にあることを明確に示そうとする意図が、またその新たな用語が学術用語として一般に受け入れられる可能性のあることを意識していたことが、窺える。さらには、先に触れたようにマイスナーがヴォルフのドイツ語著作に基づく『哲学辞典』を編纂することで、彼の用いる学術用語がドイツの大学社会で受容されることがあげられる。また、ルードヴィキは自らの著書『ヴォルフ哲学の歴史』に、ヴォルフの学術用語に関するドイツ語とラテン語の対照表を附している。当時の学術共同体には、このような独羅対照表に対する一定のニーズがあったと考えられる。また、ヴォルフならびにその哲学については、その後ツェードラーの『万有事典』¹⁶⁾に項目として取り上げられ、詳細な説明がなされることになった¹⁷⁾。こうしたことを勘案すると、遅くとも18世紀の30年代後半以降、ヴォルフの用いたドイツ語のタームが専門用語として認知され、当時のアカデミックな社会に次第に浸透していったと考えられる。これらのことから、ヴォルフの学術用語に注目することには十分な理由が認

12) Heinrich Adam Meissner, *Philosophisches Lexicon aus Christian Wolffs sämtlichen deutschen Schriften*, Halle 1737, Neudruck Düsseldorf 1970.

13) Carl Günther Ludovici, *Ausführlicher Entwurf einer vollständigen Historie der Wolffischen Philosophie*, 3. Bde, Leipzig 1738, Neudruck Hildesheim u. New York 1977.

14) ヴォルフは1723年にハレならびにプロイセンからヘッセンのマルブルグへ亡命し、その地の大学で教育ならびに学術活動を行ったあと、1740年に、その年プロイセンの統治者となったばかりのフリードリッヒ二世の勅命により、ハレに帰還している。

15) Vgl. Menzel, *ibid.*, S. 11, Anm. 12.

16) Johann Heinrich Zedler, *Grosses vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste...* (UL), 64 Bde., Halle u. Leipzig 1732–1750, Suppl. (bis Caq), Halle u. Leipzig 1751–1754, Neudruck: Graz 1961–1964.

17) Artikel „Wolf, Christian“ in: *Zedlers Universal-Lexicon*, *ibid.* Bd. 58, Sp. 549–677. Artikel „Wolfsche Philosophie“ in: *ibid.* Bd. 58, Sp. 883–1232.

められるだろう。ドイツ語の学術用語の研究書でピウは次のように述べている。「ドイツ語の哲学用語を産み出したのはライプニッツではなく、トマージウスでもない。それはヴォルフである。ヴォルフ以前になされた同様の試みのうちにも、優れたものがありはしたが、総じていえば予行演習であり、試作にすぎなかった。ヴォルフによってようやく、哲学的なドイツ語は自らの確固とした規範を手に入れたのであり、この規範がその後カントに至るまで、僅かなぶれはあったものの、少なくとも語彙に関しては標準であり続けた」¹⁸⁾。メンツェルは特にヴォルフを主題的に扱い、以下のように述べている。「諸々の学術分野でのラテン語からドイツ語への移行のプロセスにおいてヴォルフの担った決定的な役割は、彼がドイツ語をはじめて明確で表現力に富む、また理解可能な学術語にしたことである」¹⁹⁾。

『ヴォルフ哲学』の著者ルドヴィキはライプツィヒ大学の教授であり、また少なくとも同書執筆時にはヴォルフ哲学の信奉者であったと思われるので、ヴォルフがその内容についてまったく知らなかったとは考えにくい。また、もしヴォルフが自らの業績に関わるこの作品に満足していなければ、出版を止めることもできただろう。したがって、彼のヴォルフ書に収められた独羅対照表は、資料とするに足るものと思われる。マイスナーの辞書についても、ほぼ同じように考えることができる。もしヴォルフがその内容に不満であったならば、出版を承認しないことができたはずである。ただし、どの程度ヴォルフ自身が満足していたのかは定かでない。のちにみるように、マイスナーの辞書には、引用箇所ないし参照箇所が必ずしも記されておらず、その内容について確認することが困難なことがある。また、「表象」に関してなど、ヴォルフ自身と異なる対応語をあてていることが確認できる。肯定的な評価としては、ピウがこの辞書について「信頼できる」²⁰⁾と述べていることがあげられる。

本稿では、ヴォルフの『ドイツ語の論理学』²¹⁾ならびに『ドイツ語の形而上学』、マイスナーの『哲学辞典』、ルドヴィキの手になる「独羅対照表」(『ヴォルフ哲学の歴史』に所収)を主な資料として、認識に関わるヴォルフの六つの用語について素描することにした。なお、ヴォルフ自身は、自らの哲学をドイツ語で叙述することについて、以下のように述べていた。「私はドイツ語の諸々の言葉を、それらのもつ従来の意味で用い、また専門用語とするに際して、従来の意味に基づいて選んだ。というのも、[...] 私がドイツ語の諸々の言葉をその本来の意味で用いることで、私の専門用語は、純粋なドイツ語であり続けるからである」²²⁾。この叙述が特に何を意図するものであるのかは定かでないが、ラ

18) Piur, *ibid.*, S. 47. ピウはまた、次のようにも述べている。「ヴォルフの偉大さは、言葉を新たに創作したことにあるのではなく、むしろ新たに確定したこと、ドイツ語の用語を優先したこと、それまで専門用語として使われていなかった抽象概念を、ドイツ語の哲学用語に取り入れたことにある」(Piur, *ibid.*, S. 50)。

19) Menzel, *ibid.*, S. 266.

20) Piur, *ibid.*, S. 8.

21) Wolff, *Vernünftigen Gedancken von den Kräften des menschlichen Verstandes* (DL), Halle 1713, herausgegeben und bearbeitet von Hans Werner Arndt, Hildesheim 1965.

22) Wolff, *Ausführliche Nachricht von seinen eigenen Schriften, die er in deutscher Sprache heraus gegeben*, Frankfurt 1726, Neudruck: Hildesheim u.a. 1973, S. 34.

テン語をそのままドイツ語として用いたり、ラテン語で用いられる言い回しを直訳したりすることが、暗に批判されているようである²³⁾。

II. 認識の成立への反省

認識の成立を反省する脈絡では、一般に以下のような試みが行われていた。認識は一つの結果であり、その成立に先立ってこれを制約する一群の道具立てが前提としてあり、それらを常にすでに使用しつつ、私たちはこの世界のうちに生きている。しかし、ふだん私たちはこれら道具立て、つまり認識が成立する諸条件を意識することがない。この意識されることのない諸条件について、その一つ一つの要素を抽出したうえで、それら要素相互の関係ならびに働きを明らかにすることで、私たちの認識が成立するメカニズムないし構造を解明すること、これが近代以降の認識論において繰り返し試みられた主要な課題である。ここでの認識は、経験に読み替えることができる。したがってこの反省的考察は、経験に先立って経験そのものの可能性を制約する諸々の条件を解明することである、と言い換えることもできる。この、経験に先立つ条件の解明という課題を担っていたのが、当時の認識論ないし形而上学である。

一般には、感性と知性の区分にはじまり、この知性をさらに区分することで、経験に先立ってすでに人間がもっている能力一般を明らかにすること、これが認識に対する反省の脈絡で常に求められている作業に他ならない。ここで前提とされている考え方は、心は白紙で生まれてくるとしても、これに何かを記述するためには、何らかの筆記用具が必要であり、またこれを使う能力が前提とされる、ということである。経験や認識の成立に先行する位置には、これを白紙のペーパーに書き込む作業をするもの、知性をもった筆者としての主観が前提とされるわけである。

認識の成立への反省はまた、成立している世界のあり方の理由を対象の側に、すなわち客観の側に問うことでもあり、感性的に捉えられた世界という広がり起源を、対象世界自身の側に問うことでもある。換言すれば、客観として成立している対象世界について、それが主観との関係性を持つ以前に、ないしは主観との関わりを離れたところで、どのようなものであるのかということが問われる。主観の活動が客観的对象を構成しているとしても、ただこの活動だけが対象世界の成立する条件であると考え難いので — そのように考えるならば、いわゆる独我論に陥る — 成立している世界から主観性の要素をすべて取り払い、そこに残ったものをいわば客観そのものとして明らかにしようと試みるわけである。

23) 『ドイツ語の論理学』の編者アルントによれば、ここで暗に批判されているのは、ヴォルフに先立って同じ試みを行ったトマージウスである。以下を参照。H.W. Arndt, Einführung zu Wolff, *Vernünftigen Gedancken von den Kräften des menschlichen Verstandes*, ibid., S. 101.

以上をまとめると、なぜ対象世界は別様ではなくまさに現にあるような仕方で存在しているのか、という問いに答えるために、主観の側で前提される制約を解明するとともに、また客観の側で前提とされる制約をも明らかにすることが、認識の成立を説明するために求められるわけである。西洋近代哲学の脈絡においては、主観の側に前提される制約として感覚、悟性ないし知性、理性などが取り上げられ、さらに詳細に説明するに際しては、構想力、自己意識ないし統覚、判断力などがこれに加えて考察された。客観の側に最後まで残るものとみなされるのは、(ものの)延長、運動、アイデア、物それ自体などである。以下では、認識の成立に関わる主要な概念のうち、特に主観の側に位置づけられるものについて、ヴォルフがこれらをどのような意味で用いているのか、またそのラテン語との対応関係について素描する。なお、考察の順序は、J.バウマンの『ヴォルフの概念規定』²⁴⁾にしたがう。

Ⅲ. 各用語の解釈

1. 「表象 Vorstellung」：言葉の成り立ちからみるならば、この語は「前 vor」、そして「立てる stellen」からなる動詞 vorstellen に基づき、これが名詞化されたものである。したがって最も基本的な意味は、「前に立てること / 前に立てられたもの」であり、そこから思考のうちで想定されたもの、イメージされたものや、目の前に現存在するもの、知覚されたもの、といった意味が派生する。ヴォルフは『ドイツ語の形而上学』に附したインデックスで「表象 Vorstellung」に「アイデア Idea」を対応語としてあてている。ルードヴィキもまた「対照表」で、„idea“(S. 88)をあてている。マイスナーの『哲学辞典』では複数形 „Vorstellungen“ に „repraesentationes“ があてられている。ルードヴィキはヴォルフ自身の翻訳に忠実であり、マイスナーはなぜか異なるタームをあてたことになる。

「表象」についてヴォルフは『ドイツ語の形而上学』で以下のように説明している。「私たちは諸々の事象をそれ自身としてか、または言葉ないしはそれ以外の記号によって、表象する。例えば、今ここにいないあるひとについて考え、彼の姿をいわば眼前に描くならば、私は彼そのひとを表象している。しかし、私が徳について、徳とは一つの完成であり、自らの諸行為を自然の法則にしたがって方向付けることであると、諸々の言葉によって考えるならば、私は徳について諸々の言葉によって表象している」(DM § 316)。ここでは、眼前に見えるものについての表象と、眼前にはなく、想起することでみられる表象が、双方ともに「直接的な表象」とみなされている。欄外に附された説明からは、これらが共にヴォルフの枠組みにおいては「直観的認識」に属することが確認できる。ここでは

24) Julius Baumann, *Wolfsche Begriffsbestimmungen. Ein Hilfsbüchlein beim Studium Kants*, Leipzig 1910. なお、『経験的心理学』(PE)、『合理的心理学』(PR)からの引用に関しては、このバウマンのテキストに記されたドイツ語訳に基づいている。

さらに、これらと異なるものとして、言葉や数字等を介して得られる表象が提示されている。この表象について、ヴォルフは「象徴的 figürlich」という形容詞を用いて説明している。この言葉がこの脈絡で担う第一の意味は「直観的」ではない、ということであり、「figür」は形態や形象ではなく、言葉や記号を介していること、したがって「概念的」ないし「抽象的」ということである。

なお、ヴォルフならびにルードヴィキが「表象」に附した「アイデア」は、感官の対象となるすべてのものを含む広範な意味の射程をもつ語として理解されている。したがってプラトンの用いる意味での「アイデア」、すなわち現象するものの原型、それ自身現象することのない本来の姿、とはかなり異なる。

このタームについて、マイスナーの辞書には次のような記述がみられる。「表象は、世界内にある事物と類似性をもつはずである。」(S. 689)。参照箇所が示されていないので、ヴォルフがどこでこのように述べているのかは確認できない²⁵⁾。「類似性 Ähnlichkeit」という表現で意味されているのは、表象は世界内にある事物そのものではない、ということである。ここでマイスナーが「表象」に „repraesentatio“ をあてていたことが想起される。この語には、「形象的描写」や「模写」という意味がある²⁶⁾。このことから考えるならば、「表象」は世界内の事物そのものではなく、私たちがそれを捉えようとするときに、この捉えようとする活動によって、いわば結果として与えられるものであり、こちらの側に残るものである。換言すれば、それは私たちの認識能力を通じて捉えられた限りでの事物、「形象的に」「描写」された事物であって、両者はまったく同一のものであるわけではない。別の言い方をすれば、表象はあくまでも私たちの認識能力を通じてもたらされたものであって、この能力のもつ機能に制約されているので、もとのもの、すなわち世界内の事物そのものではない。例えば、眼前の木々は緑色や茶色に見えるけれども、それら自身がそのような色をもつわけではなく、光の当たること、一定の距離など、様々な条件のもとで私たちがこれを見るときに、つまり私たちの認識能力がこれを把握しようとするときに、そのようなものとして現われるわけである。音や温かさなども同様である。ヴォルフは『ドイツ語の論理学』で繰り返しロックに言及しており、アルントによればロックの認識論を学習している²⁷⁾ ので、対象そのものとこれについての表象を区別することについては、ロックからの影響が十分考えられる。ただ、事象の性質に関するロックの区分、特に一次性質と二次性質の区分をどの程度ヴォルフが受容していたのかについては、定かでない

25) 「類似性」についてヴォルフは以下のように述べている。「類似性とは、それによって諸々の事物が認識され、また互いに区別されるべきもの〔特徴〕の一致である」(DM § 18)。表象と事物の対応関係という脈絡で「類似性」がどのような意味をもつのかは、この説明からだけでは明確にならない。

26) 以下を参照。Artikel „repraesentatio“ in: *Ausführliches Lateinisches-Deutsches Handwörterbuch...*, von K.E. Georges, zweiter Band, Hannover 1972, Sp. 2329.

27) ロックへの言及については以下を参照。DL, S. 107f., 207f., 216. また『ドイツ語の論理学』の編者アルントは、第1章ならびに第8章に附した註で、ヴォルフがロックの認識論を踏まえていることを確認している。以下を参照。DL, S. 259, Anm. 6; S. 271, Anm. 1.

い。いずれにしても、世界内にある事物は、この事物についての私の表象とまったく同じものではない、ということがここでの要点である。そして、このような観点が、認識の成立に関する問題として、後続する世代に継承されることになる。

2. 次に「感覚 Empfindung」。ピウによればこの語は、ヴォルフがこれを用いることで確固とした哲学の専門用語となった²⁸⁾。ヴォルフ自身は『ドイツ語の形而上学』で「感覚 Empfindung」に „Sensatio“ をあてている (S. [674])。ルードヴィキの「対照表」では、„Empfindung“ に「知覚 perceptio」ならびに「感覚 sensatio」があてられている。マイスナーでは複数形の見出し語 „Empfindungen“ に「感覚 sensationes」があてられている (S. 158)。「感覚」は、事柄としてみるならば、認識主観とその客観がいちばんはじめに触れ合うことを、主観と客観の最初の接触を、意味している。換言すれば、このタームは認識の成立を遡及的に考察するにあたって、主観と客観が出会うその端緒に位置している。そして、ここで何が起きているのかを把握し、表現することは、原理的に極めて困難な作業であり、認識の成立を反省する脈絡では常に繰り返し考察されることになる哲学の主要な課題の一つに他ならない。

この語についてヴォルフは『ドイツ語の論理学』第1章の冒頭で、次のように説明している。「もし私たちがあるものを私たちにとって現在するものとして自覚するならば、私たちはそのものを感覚する。すなわち私たちは、痛み、音響、光、私たち自身の思考、といったものを感覚する」(DL I § 1)。「感覚」はまず、直接的に触れるもの、主に感性的な事象について、ただ曖昧に感じるのではなく、はっきりと意識することを意味している。「現在する」、すなわち現実ここに存在するものとして「自覚する」とは、明確に対象として把握することであるだろう。これらとは異なり、「私たち自身の思考」は、一般的な意味での感性的な対象ではなく、むしろ抽象的なものである。しかし、主観が自身の思考活動のうちで、直接これに触れるもの、直接的に自覚するものであるとはいえるだろう。何らかの外的対象へと向かう意識を前提とし、この意識へと向かう反省的意識を考えるならば、第一の意識を第二の意識が「感覚」していることになる。ここで、「私は考える、ゆえに私は在る」というデカルトの第一テーゼが想起される。デカルトは、方法的懐疑を経て得られたこの自我を、自らにとって諸々の外的対象より以上に身近なもの、それら以上に確実に存在するものとみなしていた²⁹⁾。「感覚」の対象としてヴォルフが、「私たち自身の思考」をあげるとき、そのことで考えていたのは諸々の対象を考察する意識に対してこれを反省する意識、すなわち反省意識ないし自己意識だったと思われる。そして、私たち自身の思考を思考として把握する意識の働きは、単なる感性的な働きではなく、それ自

28) 以下を参照。Piur, *ibid.*, S. 75.

29) 以下を参照。René Descartes, *Discours de la Méthode*, übersetzt u. hrsg. von Christian Wohlers, Hamburg, 2011, S. 57ff.

身一つの思考であるので、「感覚」もまた「考える」ないし「思考」の一つのあり方であると、みなすことができる³⁰⁾。マイスナーは自らの編纂した辞書の「感覚」の項目で、以下のように述べている。「ヴォルフ氏は感覚を、心による諸々の思考の一つに数えている。というのも、感覚は […] 本来身体に帰属し、どのような感覚のもとでも身体の内に変化が生じ、またわれわれがこの変化をもたらした事物を自覚しているからである。この事物と身体の変化は、われわれがこれらを感じるときには、連続しているはずである」(S. 158)。ここで「感覚」は、まず言葉本来の意味に基づいて、身体に関わる変化を感性的に理解する働きであるとみなされる。そのうえで、身体の変化ならびにこれをもたらす事物が認識主観によって「自覚」されることが、「思考」であるとみなされるわけである。何ものかを感性的に受容することが、ある種の思考であるとする、思考すなわち概念や命題を用いた意識の働きと、感じること、感覚すること、という意識の受動的な働きの境界が不定かになるだろう。換言すれば、受動的な意識の働きと能動的な意識の働きとが、ここでは截然と区別されていない。「思考」はここで、ものの感性的な受容をも含んだ広範な意味をもつことになる。

また、『ドイツ語の形而上学』では次のように述べられている。「諸々の感覚によって私たちは、私たちの感官の一部に触れる物体を表象する」(DM § 749)。ここでの「感覚」は、感性的な対象に触れることを意味し、外的なものを表象する作用に重なる。また、以下のようにも述べられている。「私たちの外部にある事物を直接的に感受する能力は、諸々の感官という名称と呼ばれ、みる、聞く、感じる、臭う、味わう、という五つのことが数えられている」(DL I § 3)。「感覚」する能力はここで、感官に帰されている。感官によって「感覚」されるのは、事物そのもののもつ性質ではなく、その事物を「感覚」する感官のあり方によって制約されたうでの事物の性質である、というのが先の前提であった。「感覚」というタームについては、その後、主観と客観の最初の触れ合いを示すものとして、すなわちあらゆる認識の成立に関する端緒に位置するものとして、様々な哲学者のもとで繰り返し吟味に附されることになる。

3. 「構想力 *Einbildungskraft*」³¹⁾ について、ヴォルフは『ドイツ語の形而上学』のインデックスで「想像 *Imaginatio*」(S. [673]) を、「構想 *Einbildungen*」には、„*Phantasmata*“ を対応語としている。ルードヴィキの「対照表」でも「構想力」に「想像 *imaginatio*」が、「構想」には „*phantasmata*“ があてられてる。マイスナーもまた「構想力」に「想像

30) ヴォルフは「思考」について以下のように述べている。「それによって私たちが自らを意識するような心の作用は、思考である。というのも誰もが、もし自分が何ものをも意識していないならば、その間自分は思考していない、と述べるからである。したがって諸々の感覚は、私たちにとって現在する事物についての思考である」(DL I § 2)。ここでの記述からは、ヴォルフが「感覚」をある種の「思考」であるとみなしていることがわかる。

31) ピウによれば、この語はすでに先行するショットリウスの文献にみられ、古くはマイスター・エックハルトが „*bilderinne*” という語を同じ意味で用いていた。以下を参照。Piur, *ibid.*, S. 67.

imaginatio」(S. 152f.) を、「構想」に „phantasma“ をあてている。『ドイツ語の論理学』でヴォルフは、「構想」ないし「構想力」と異なる能力として、すでに「感覚」の説明箇所にもみられた「感官 Sinn」をあげ、これについて以下のように述べている。「感官は私たちの外部にある事物を思考するきっかけを与える。それで感官は私たちにその事物の概念をもたらす。つまりみることによって光と色の概念を、聞くことによって音の概念を、感得することによって柔らかさと硬さの概念を、臭うことによって香りと臭いの概念を、味わうことによって甘さと酸味についての概念を、それぞれもたらす」(DL I § 5)³²。「感官」は、その場にあるもの、現前するものについて、これを直に把握する能力であり、したがってまた自ら事象の概念をもたらす能力であるわけだ。これに対して、「構想」については次のように簡潔に記されている。「構想は、その場にはない事物についての表象である」(DM § 235)。また別のテキストでは次のように述べられている。「感性的にその場にはない諸々の事物についての知覚を産み出す能力が、構想力である」³³。ここで「構想」ないし「構想力」は、現前しないものについて、これを想像する、ないし想起する能力とみなされ、現前するものについてこれを把握するのが「感官」であり、両者が対照的な能力とみなされている。そして、現前する対象については感官と悟性が共に働くことで、判明な認識が成立するとみなすわけである。マイスナーは次のように述べている。「構想力は、その場にはない諸々の事物についての表象を産み出す能力である。構想力はしかし、私たちがすでに別の時間に考えたことのある事物についてだけ関わるものではなく、私たちがこれまで一度も感覚したことのないものにも関わる。これには二通りの仕方がある。第一の仕方では、私たちが実際にみたことのある事物を、もしくはただ図像のうちにみる事物を、随意に分割し、またそれら様々な事物の諸部分を随意に結びつけ、そのようにして私たちがこれまでみたことのないものが現われる。このような仕方では、異教の神々もつ奇妙な形態もたらされたのである。[...] そして、構想力のもう一つの作用により、決して目の当たりにされたことのないものが、根拠律を用いることで産み出され、真理の含まれている図像が産み出される。ここへは、建築家が建築術の規則にしたがって思考のうちに表象する建築物の図像が帰属する」(S. 152f.)。参照箇所が示されていないので、どの著書からとられた文章であるかわからないが、ここにはマイスナーを通してみるヴォルフの「構想力」が丁寧に描かれている。それでは、ここで可視的ではないが根拠律を用いることで産み出され、真理を含むとされる図像で、ヴォルフは何を考えていたのだろうか。構想力の第一の働きによって、「異教の神々」が、「奇妙な形態」のものとしてもたらされたことから考えるならば、「真理の含まれている図像」ということで意味されているのは、

32) 同書には、次のような記述もみられる。「私たちは外的諸事物の概念を得ることができ、またそこからそれらについて確実に判断することができる、たとえ私たちはそれら概念がどこに由来するのか(ロックの概念か、それともライプニッツの概念か) わからない場合にも。それはちょうど私たちがどの方向にむけてでも手を伸ばすことができるのと同様に。なるほど私たちは、どのようにそれが内面的に準備され、またどのようにして求められた働きを行うことができるのか、わからないのではあるが」(DL § 6cI)。

33) Wolff, *Psychologia empirica methodo scientifica pertractata* (PE), Frankfurt & Leipzig ²1738 (¹1732), § 92.

恐らくヴォルフ自身の考える本来の「神」の姿である。それは、存在するものの全体としての世界に対して、その第一原因ないし起源の位置に、充足根拠律に基づいて「産み出される」ものである。換言すれば、世界という建築物の存在することの充足根拠として、建築術の規則からして、不可避的に求められるものである。もしこのような解釈が正しければ、ここでは充足根拠律が経験の領域を超えるところにまで適用されていることになる。

4. 「悟性 Verstand」については、『ドイツ語の形而上学』でのインデックスでは „R“ の項目で「純粹悟性 reiner Verstand」として示され、„Intellectus purus“ が対応語とされている。ルードヴィキの「対照表」では、„Verstand“ と „reiner Verstand“ が併記され、これに „intellectus purus“ が附されている。マイスナーは「悟性 Verstand」に „intellectus“ をあてている。この語についてヴォルフは次のように述べている。「可能なものを表象する能力が悟性であり、そのことにより悟性は諸々の感官と構想力から区別される。また諸々の感官と構想力によるだけでは、諸々の表象はせいぜい明晰なだけで、決して判明ではない。これに対して悟性に加わるならば、それら諸々の表象は判明となる」(DM § 277)。先に「構想」のところのみた叙述を参考にするならば、ここで「諸々の感官」はただ現実に目の前にあるものだけを表象する能力であり、「構想力」はこれと逆にただ現前しないものだけを表象する能力である。これに対して「悟性」は、感官とともに現前するものについて表象し、構想力とともに現前しないものについてこれを表象する能力として位置づけられている。さらにまた、認識の程度を表す「明晰ならびに判明」という基準について、あるものがそれ自体としてはっきりとしていることを示す「明晰」ということについては、「感官」や「構想力」による表象にも認めるが、さらにそのものが他のものとはっきりと区別されていることを示す「判明」という上位の段階については、「感官」と「構想力」に加えて、「悟性」の働くことが求められるわけである。

また、次のようにも述べられている。「私たちがある事物を判明に表象するやいなや、私たちはその事物を認識する。またもし私たちの諸々の概念が判明であるならば、私たちの認識もまた判明である」(DM § 278)。ここでの記述から、判明な表象が、認識を意味するということが確認できる。判明な表象は、感官が悟性と共に働くところに成るものであった。そして、判明な表象である認識が、また判明でもあることは、私たちのもつ概念の判明性に基づくことみなされている。したがってここでの記述によれば、感官だけによるのでは、判明な表象は成立せず、したがってもちろん判明な認識は得ることができない。

同じ『ドイツ語の形而上学』には、次のような記述もみられる。「認識の判明性は悟性に属し、これに対してそれが不明瞭であることは感官と構想力に属するのであるから、もし私たちがまったく判明な認識をもつならば、悟性は感官と構想力から区別されている。これに対して私たちの認識に不明瞭さや曖昧さが認められるならば、その認識は諸々の感官ならびに構想力と一つになっている。第一の場合に悟性は純粹と名付けられ、他方の場

合には純粹ではないといわれる」(DM § 283)。認識は一般に感官と悟性ないし構想力と悟性が共働することで成立する。その前提のうえで、「感官と構想力」から悟性が区別され、悟性が単独で認識活動を行うとき、「純粹」であり「まったく判明」であるような認識が成立すると仮定されている。すなわち視覚や聴覚等の感官から独立し、悟性が単独で対象認識を行うところに、純粹な認識が成立すると、仮定されているわけだ。悟性の純粹な働きについては、以下のようにも述べられている。「悟性をもつ事象の概念が混乱しておらず曖昧でもなければ、悟性は純粹と名付けられる」(PE § 313)。「悟性は、感官ならびに構想力から独立しているならば、純粹である。これは数の認識に際して把握される」(PE § 304)。ここでは数学的思考のうちに「純粹」な悟性の働きが認められている。すなわち、数学的思考が感官ならびに構想力から独立する悟性の働きとみなされているわけだ。それでは、数学以外の領域では純粹な悟性の働きは認められないのか。

例えば歴史を振り返るならば、主に地上から太陽の動きを観察することに基づき、長らく天動説が採られてきた。天動説は、主に感官に基づき、現実感覚がその基礎に置かれている。これに対して地動説は、感覚的には「不動」である大地を動くものと考え、視覚的には動いている太陽を不動と仮定し、その位置関係を数学的に説明するのであるから、感覚から独立する思考に基づくものだといえる。少なくとも、天動説に比べると地動説はより感官から離れたところで、より計算に即して、仮定されているといえる。しかしそれでもまったく観察から独立しているわけではなく、太陽と地球だけでなく惑星間の位置関係などの観察に基づくデータが基礎資料とされ、その諸関係をより高い整合性のもとに説明しようとするところから成り立つ考え方である。したがって、感性に対する悟性の優位を決定づける事例として繰り返し言及されるこの世界観の「転回」についても、感性からまったく独立に成立する認識であるとはいえないだろう。恐らく、論理学や数学を除けば、認識は常にすでに感官を前提とし、そのうえで構想力やさらには悟性の働きを必要とする。ヴォルフ自身次のようにも述べている。「私たちの悟性はどのような場合にも完全に純粹ではない」(DM § 285)。ここには、悟性が決して完全に感官ならびに構想力と切り離されず、決して単独で対象認識を産み出すことはできないという、認識の成立に関する根本的な解釈が語られている。ヴォルフは、悟性による単独での認識ということについては、その可能性を認めなかった。この点については、以下のようにも述べられている。「諸々の概念の解明は、事象を感官の助力により確かに明晰にはあるが、しかし判明ではなく理解するところで終わるのを常とするので、悟性は感官と構想力から決して独立しておらず、したがってまた決して完全に純粹ではない」(PE § 315)。一般の対象に関する認識については、感官と構想力を離れた悟性だけによる対象認識の可能性は、認められていない。

5. 「統覚 Apperzeption」は、『ドイツ語の形而上学』のインデックスには見出し語として記載されていない。バウマンの『ヴォルフの概念規定』(1910)では、「自己意識 Selbstbewußtsein」と一つの項目を成しており (S. 18)、両者はほぼ同じ内容をもつとみなされている。言葉の成り立ちからみるならば、「統覚 Apperzeption」は、「知覚 Perzeption」を前提とし、そのうえでこれに「付加 ad」される働きである。換言すれば、統覚は、知覚という第一次的な働きを前提とし、これに付加される第二次的な把握ないし意識の活動である。ルードヴィキの「対照表」には、「意識 Bewußtsein」、„Selbstbewußtsein“、„Apperzeption“ はみられない。マイスナーは、ラテン語のまま „Apperceptio“ を項目として立てている (S. 27)。『合理的心理学』で、ヴォルフは以下のように述べている。「統覚は、部分的な知覚の明晰性から生成する。というのもそこで心は同時に知覚された諸々の事物を意識するからである」³⁴⁾。ここでは、統覚が知覚を前提として成立することを確認できる。また、『経験的心理学』には、次のような説明がみられる。「精神が自らの知覚を意識する限り、精神には統覚が付与される (デカルトの自己意識)」(PE § 25)。ヴォルフの用いる「統覚」概念が、デカルトの「考える私」ないし自己意識に連なることを、ここに確認することができる。「統覚」は、外的対象へと向かう意識を対象化し、自己自身を対象化する意識であり、反省的な意識である。ラテン語「統覚 Apperceptio」について、マイスナーは以下のように述べている。「この用語はライプニッツ氏が最初に用いたものであり、その意味するところは、心が自己の意識とともに何ものかを表象する […]、ないしは、自らが表象しているところのものを心が同時に自覚する […] ということである」(S. 27)。ここでの叙述から、「統覚」が対照へと向かう意識に随伴する意識、ないしは対象意識に対して反省的に働く意識として理解されていたことがわかるだろう。ここでマイスナーはこのタームがライプニッツの思索から産まれたものであることを明示しており、ライプニッツの思考の枠組みを用いてヴォルフを解釈しているといえる。

6. 「理性 Vernunft」は、『ドイツ語の形而上学』のインデックスでは „Ratio“ (S. [676]) があてられており、ルードヴィキの「対照表」でもまた、„ratio“ (S. 87) があてられている。また、この「対照表」のラテン語の項目 „ratio” には、„Vernunft“ とともに „Grund“ があげられ、「充足根拠律 Rationis sufficientis principium, Satz des zureichenden Grundes」(S. 97) が附記されている。この、いわゆる根拠律といわれる原理が、理性に帰属すること、理性の原理であるとみなされていることが、ここに確認できる。マイスナーもまた「理性 Vernunft」の項目に „ratio“ をあてている (S. 644)。ヴォルフの著書では、以下のように述べられている。「推論する術が示すのは、諸々の真理が相互に結合し

34) Wolff, *Psychologia rationalis method scientifica pertractata* (PR), Frankfurt & Leipzig 1740, § 20.

ていることである。— 私たちが諸々の真理の連関のうちにもつ洞察、ないしは諸真理の連関を洞察する能力は、理性と名付けられる」(DM § 390)。理性はここで諸々の真理、すなわち真として認められた諸認識の、相互連関を洞察する能力とされている。ここでの記述にしたがえば、すでに出来上がった一連の真なる認識が、ここでは前提されており、そのうえでこれら個々の認識の間にその連関を読み取る能力として理性が位置づけられている。換言すれば、理性は直接に感性的な対象に関わる能力ではない。先にみた感官、構想力、悟性といった能力が、少なくとも個別的な認識を産み出す脈絡でも働く能力であるのに対して、理性は、個別的な認識がすでに成立しており、その真理性についての評価が定まっていることを前提としてはじめて働く能力である。また、『経験の心理学』には、以下のような記述がみられる。「理性は、一般的な諸々の真理の結びつきを洞察する、ないしは見通す能力である」(PE § 483)。「理性に即しているまたは一致しているとは、認識された諸々の真理と、ないしは一般的な真なる諸命題と結合している、ということである。理性に反しているとは、一般的な諸々の真理に矛盾しているということである」(PE § 485)。

推論の能力としての理性は、以下のようにも説明されている。「理性を介して認識されるものは、われわれがすでに知っているところの他の諸命題または諸判断と諸定義から、推論される」(PE § 494)。「もし私たちが推論において、ア・プリアリに知られている諸定義と諸命題以外の何ものも許容しないならば、理性は純粹である； — 算術、幾何学、代数学における純粹理性」(PE § 495)。純粹な理性のもとにヴォルフがどのような認識の働きを考えていたのかが、ここでの記述から理解できる。純粹理性とは、ア・プリアリに知られている諸定義と諸命題からのみ推論する理性であり、また幾何学や代数学において働く論理的思考に他ならない。

以上は、認識に関わる主な能力についてヴォルフが用いたターミノロジーから抜粋したものである。これらは、彼の用いたドイツ語の用語のほんの一部にすぎない。ヴォルフの用いたタームについて、その概要を知るために役だつと思われる対照表を、附録とする。

附録

以下に、ルードヴィキの著書にみられるヴォルフの用語のインデックスのうち「ドイツ語—ラテン語」の部分³⁵⁾から抜粋した主要なタームについて、ドイツ語、ラテン語そしてこれに附した日本語訳を記す。なお、日本語訳は、基本的にドイツ語のタームに即している。

Carl Günther Ludovici, *Ausführlicher Entwurf einer vollständigen Historie der Wolffischen Philosophie*, 3. Bde, Leipzig 1738, Neudruck: Hildesheim u. New York 1977, Bd. 1 S. 78-100.

35) この「対照表」は、ドイツ語の見出しにラテン語を附した部分 (S. 78-89) と、ラテン語の見出しにドイツ語を附した部分 (S. 89-100) からなる。

I. ドイツ語—ラテン語—日本語

Absicht; finis 意図

Aufgabe; problema 課題

Auflösung; resolutio 解決

Auflösung der Aufgabe; resolutio problematis 課題の解決

Auflösungs-Kunst; analysis 解決術

Ausdehnende Krafft; vis elastica 拡張力

Ausnahme; exceptio 例外

Aussage; enunciatio, thesis 命題

Bedingung, Schluß unter einer Bedingung; syllogismus hypotheticus 条件、ある条件のもとでの推理

Begebenheit; eventus 出来事

Begierde, Sinnliche Begierde; appetitus sensitivus 欲求、感性的欲求

Begreifen, comprehendere 理解

Begriff; notio, idea 概念

Allgemeiner; universalis 普遍的概念

Ausführlicher; completa 周到的概念

Besonderer; singularis 特殊な概念

Deutlicher; distincta 判明な概念

Klarer; clara 明晰な概念

Lehr-Begriff; systema 体系

Unausführlicher Begriff; notio incompleta 周到でない概念

Undeutlicher; confusa 判明でない概念

Unvollständiger; inadaequata 不完全な概念

Verknüpfung der Begriffe; nexus notionum 概念の結合

Vollständiger Begriff; notio adaequata 完全な概念

Willkürlich formierter Begriff; notio arbitraria 恣意的な概念

Zergliederung der Begriffe; analysis notionum 概念の分析

Bemerkung; observatio 観察

Beschreibung; descriptio 記述

Bestehend, Ein vor sich bestehendes Ding; substantia 自らだけで成立する事物、実体

Ein durch ein anderes bestehendes Ding; accidens 他のものに依存する事物、偶有性

- Bewegungs-Grund; motivum 動機
Bey-Wörter; adverbia 述語
Bey-Wörter der Nahmen; praepositiones 前置詞
Blosse Vorstellung der Dinge; simplex rerum apprehensio 諸事物の単なる表象
- Deutliche Erkenntnis; cognitio distincta 判明な認識
Diesheit; haecceitas, individuationis principium このもの性、個性原理
Ding, Allgemeine Harmonie der Dinge; harmonia universalis 事物、諸事物の普遍的調和
Der Dinge Art; species 諸物の種
Einzelnes Ding; individuum 個体
Geschlechter der Dinge; genus 諸物の類
Sich auf einander beziehende Dinge; relata & correlata 相互に関係する諸事物
Verknüpfte Dinge; connexa 結合された諸事物
Vor sich bestehendes Ding; substantia 自らだけで成立する事物、実体
- Dunkler Begriff; notio obscura 不明瞭な概念
Dunst-Kugel; atmosphaera 雰囿気
Durchmesser; diameter 直径
- Eigenschaft; attributum 属性
Einbildungen; phantasmata 構想
Leere Einbildung; sigmentum 空虚な構想
Einbildungs-Krafft; imaginatio 構想力
Einfluß; influxus 影響
Einschränkung; limitatio 制限
Einsicht, tieffe Einsicht; acumen 洞察、深い洞察
Empfindung; perceptio, sensatio 感覚
Endzweck-Wissenschaft; teleologia 目的論
Entgegensetzung; oppositio 対立項
Entstehen; oriri 生成
Auf einmahl; in instatnti 一挙に生成すること
Nach und nach; sucessive 次第に生成すること
- Erdboden; tellus 大地
Erd-Gewächse; vegetabilia 植物
Erd-Kugel; tellus 地球
Erfahrungs-Kunst; ars observandi 観察術

Erfüllung; complementum 充足

Erkenntnis; cognitio 認識

Anschauende; intuitiva 直観的認識

Deutliche; distincta 判明な認識

Figürliche; symbolica 象徴的認識

Undeutliche; confusa 判明でない認識

Erklärung; definitio 定義³⁶⁾

Erklärung der Sache; definitio realis 事象の定義

Wort-Erklärung; definitio nominalis 言葉の定義

Fertigkeit; habitus 熟練

Figürliche Erkenntnis; cognitio symbolica 象徴的認識

Förder-Glied; subjectum 主語

Förder-Sätze; praemissae 前提

Freyes Gewissen; conscientia libera 自由な良心

Freyheit, Nothwendigkeit der Freyheit; necessitas moralis 自由、自由の必然性、
道徳的必然性

Gattung; genus 類

Gedancke; perceptio, cogitatio 思考

Gegenwürckung; reactio 反作用

Gegründetes; causatum 基づけられたもの

Geister-Lehre; Pneumatologia, Pneumatica 靈魂論

Geschicke, Natürliches Geschicke; dispositio naturalis 巧みさ、自然な巧みさ

Gewissen, Antreibendes Gewissen; conscientia practica 良心、実践的良心

Freyes Gewissen; conscientia libera 自由な良心

Gehindertes; serva 妨害されている良心

Irriges Gewissen; conscientia erronea 誤った良心

Gleichgültigkeit; aequipollentia 無関心

Gottes-Gelehrtheit; theologia 神学

Grösse; quantitas, magnitudo 量

Gründlichkeit; soliditas 徹底性

Grund; ratio 根拠

Bewegungs-Grund; motivum 動機

36) マイスナーによれば、ヴォルフは „Erklärung” を定義の意味で用いている。以下を参照。Meissner, Artikel „Erklärung” in: *ibid.*, S. 170f.

- Grund-Satz; axioma 公理³⁷⁾
Grund-Urtheil; iudicium intuitivum 根本判断
Grund des Widerspruchs; principium contradictionis 矛盾の原理
Grundwissenschaft; ontologia 存在論
Satz des zureichenden Grundes; principium rationis sufficientis 充足根拠律
Der thätige Grund; principium activum 活動的根拠
Gut, Schein Gut; bonum apparens 善、外見上の善
- Harmonie der Dinge; harmonia 諸事物の調和
Haupt-Wissenschaft; Metaphysica 形而上学
Haupt-Wort; verbum 動詞
Himmels-Erscheinung; phaenomenon 現象
- Krafft; vis 力
Krafft des Stoffes; vis percussionis 物質の力
Thätige Krafft; vis activa 活動力
Ursprüngliche Krafft; vis primitiva 始原的力
Kunst, Erfahrungs-Kunst; ars observandi 技術、観察術
Sehe-Kunst; Optica 光学
Statts-Kunst; Politica 政治学
Verbindungs-Kunst der Zeichen; ars combinatoria characteristicum 諸記号の結合術
Vernunft-Kunst; Logica 論理学
Vernunft-Kunst des Wahrscheinlichen; Logica probabilium 蓋然性の論理学
Versuch-Kunst; ars experimentandi 実験術
Zeichen-Kunst; ars characteristicum 記号術
- Lehr Begriff; Systema 体系
Lehr Satz; theorema 定理
Leidenschaft; passio 情熱
Logick; Logica 論理学
Lust; voluptas 欲望
- Meß-Kunst; geometria 幾何学

37) マイスナーによれば、ヴォルフは „Grund-Satz“ を公理の意味で用いている。以下を参照。Meissner, Artikel „Grund-Satz“ in: *ibid.*, S. 509f.

Mittlere Wörter; participia 分詞

Möglich, Schlechterdings möglich; possible absolute tale 可能、端的に可能

Natur; natura 自然

Natur-Lehre; physica 自然学

Natur-Wissenschaft; physica 自然学

Recht der Natur; jus naturae 自然権、自然法

Nothwendig;

schlechterdings nothwendig; absolute necessarium 端的に必然、絶對的に必然、
geometrice necessarium 幾何学的に必然、metaphysice necessarium 形而上学
的に必然

Nothwendigkeit der Sitten; necessitas moralis 道德的必然性

Quelle der Veränderung; principium mutationis 変化の原理

Reiner Verstand; intellectus purus 純粹悟性

Satz; propositio 命題

Grund-Satz; axioma 公理

Satz des nicht zu unterscheidenden; principium indiscernibilium 不可分離律

Satz des Widerspruchs; principium contradictionis 矛盾律

Satz des zureichenden Grundes; principium rationis sufficientis 充足根拠律

Schluß; syllogismus 推理

Selbstständigkeit; aseitas 自立性

Sitten-Lehre; Ethica 倫理学

Sprung; saltus 跳躍

Staats-Kunst; Politica 政治学

Stetigkeit; continuities 恒久性

Theologie; Theologia 神学

Übereinstimmung, 調和

Vorherbestimmte Übereinstimmung; harmonia praestabilita 予定調和

Ursache; causa 原因

Würckende Ursache; causa efficiens 作用因

Vermögen; potentia 能力

Vernunft; ratio 理性

Vernunft-Lehre; Logica 論理学

Verstand, reiner Verstand; intellectus purus 悟性、純粹悟性

Vorstellung; idea 表象

Welt; Universum 世界

Wille; voluntas 意志

Willkühr; spontaneitas 選択意志

Willkührlich; spontaneum 恣意的

Würklichkeit; existentia, actus 現実性

Zufällig; contingens 偶然

Zusammenhang; nexus 連関

Wolffs deutsche Terminologie im Hinblick auf die Erkenntnistheorie

Katsutoshi KAWAMURA

Ohne Zweifel übte Christian Wolff auf die Entstehung und Entwicklung der deutschen wissenschaftlichen Fachterminologie einen großen Einfluss aus. Er gehört zu den Philosophen der Übergangsperiode, die sowohl auf Latein als auch auf Deutsch geschrieben und bewusst die neuen deutschen Fachtermini gemäß den alten lateinischen Fachausdrücken verwendet haben. Die deutschen Schriften Wolffs, die er in erster Linie für die Zuhörer seiner Veranstaltungen geschrieben hatte, wurden nicht nur in Halle, wo er als Hochschullehrer tätig war, sondern, so scheint es, auch in mehreren anderen Universitäten des deutschsprachigen Raumes verbreitet und anerkannt. Nach Sprachwissenschaftler Wolfgang Menzel erlebte seine „*Deutsche Logik*“ vierzehn, seine „*Deutsche Metaphysik*“ zwölf Auflagen, durch welche die Kerngedanken und die Terminologien der Philosophie Wolffs weit verbreitet wurden. 1737 erschien ein von Heinrich Adam Meissner verfasstes Wörterbuch, in dem die Fachtermini aus den deutschen Schriften Wolffs gesammelt und erläutert wurden. Im folgenden Jahr erschien ein Buch über die „vollständige Historie“ der Philosophie Wolffs, welches vom Leipziger Philosophen Carl Günther Ludowici verfasst wurde. Daraus lässt sich schließen, dass die philosophischen Fachtermini Wolffs im Laufe der ersten Hälfte des 18. Jahrhunderts in der akademischen Gesellschaft des deutschsprachigen Raumes weit verbreitet und anerkannt worden waren. Wolffs „Wissenschaftsdeutsch erlangte eine Vorbildfunktion und wirkte auf die Gemeinsprache zurück“, so schrieb Menzel in seiner Dissertation über die Sprache Wolffs.

In diesem Aufsatz versuche ich zu zeigen, was Wolff unter den Schlüsselbegriffen der Erkenntnistheorie wie „Vorstellung“, „Apperzeption“, „Verstand“ u.a. versteht. Diese Begriffe bildeten die Wissenschaftssprache für die Zeitgenossen und die nachkommenden Generationen heraus. Diese versuchten, ihre eigenen Gedanken damit zu formulieren. Um seine Schlüsselbegriffe der Erkenntnistheorie zu erhellen nehme ich besondere Rücksicht auf „*Deutsche Logik* und *Deutsche Metaphysik*“, und verwende das o.g. Wörterbuch Meissners und den von Ludowici verfassten Deutsch-Lateinisches Index als Hilfsmittel.